

河北新報普及センターと尚絅学院大がつくる名取のメディア

# ハナモモ通信

2019年 4月



ハナモモちゃん

【発行】河北新報普及センター  
 【協力】尚絅学院大 河北仙阪  
 【エリア】名取市内  
 【部数】11,600部  
 【電話】022(266)2991



## フル熟成のイチゴ絶品

### イチゴ狩り体験 ラ・フリーズ

観光イチゴ農園「ラ・フリーズ」が、高館の県農業・園芸総合研究所のそばに今年の1月に開業しました。施設ではイチゴ狩りが体験できます。

暖かな陽の光を取り込む温室の中で輝く、『とちおとめ』や『もういつこ』のイチゴの実。それらが30分



代表の芦田伸也さんは「市場には、中身の熟成度が7〜8分の状態で出荷されています。フルに熟成したものを食べられるのがイチゴ狩りのメリットです」とお話しされた。つまり、おいしさの秘密を教えてくださいました。つまり、おいしさのピークのイチゴが「ラ・フリーズ」で食べられるのです。新鮮な味を楽しみ尽くせるとも希少なスポットです。

ラ・フリーズでは、障がいを持つ方が11名、従業員として働いています。取材日も、収穫や仕分け作業を

1800円（5月6日から1400円）という値段で食べ放題なんて、まさに天国。濃厚な甘さにやみつきになってしまいます。入り口で受け取ったバックを片手に広いハウスの中を歩けば、大小様々に美しい形のイチゴが次々目に入り心も踊ります。

この農園は、障がいの重度に合わせた仕事を提供しています。働く時間や担当箇所も柔軟に対応し、働き手が安心して仕事ができる環境に努めているそうです。

ハウス内にはテーブルと椅子も用意され、ゆっくり座って摘んできたイチゴを堪能できるようになっています。また、バリアフリー化もされ、プランターの間も通路も車椅子が楽々と通れる程の幅が確保されています。様々な方がバリアフリーでリラククスしてイチゴ狩りを楽しめます。

お出かけ日和が続くこれからの時期、完熟イチゴを味わいにラ・フリーズに足を運んでみませんか。

（星野裕太・後藤香菜子・菊地美里）

素早くこなしていました。この農園は、障がいの重度に合わせた仕事を提供しています。働く時間や担当箇所も柔軟に対応し、働き手が安心して仕事ができる環境に努めているそうです。

ハウス内にはテーブルと椅子も用意され、ゆっくり座って摘んできたイチゴを堪能できるようになっています。また、バリアフリー化もされ、プランターの間も通路も車椅子が楽々と通れる程の幅が確保されています。様々な方がバリアフリーでリラククスしてイチゴ狩りを楽しめます。

令和元年となる今年、高館にある熊野那智神社は創建1300年の節目を迎えます。1998年以降、地域住民の方々の高齢化などにより途絶えていた「お浜降り」が、5月26日（日）閉上地区のまちびらきに合わせ記念事業として執り行われます。



「お浜降り」の由来を、熊野那智神社・井上幸太郎宮司（41）にたずねると、「716年名取郡廣ノ浦現在の閉上）に住む漁師の治兵衛が海底に光るものを見つけた。藤のイカダに抱かれた御神体を引き上げました。家に持ち帰り、大切に祀りしていましたが、ある時、廣ノ浦から西の山並みに向かい光が走り『我羽黒飛龍の神なり』とお告げがありました。719年治

令和元年となる今年、高館にある熊野那智神社は創建1300年の節目を迎えます。1998年以降、地域住民の方々の高齢化などにより途絶えていた「お浜降り」が、5月26日（日）閉上地区のまちびらきに合わせ記念事業として執り行われます。

「お浜降り」とは高館の熊野那智神社から増田を経由して閉上浜を目指すみこし巡行で熊野那智神社の神事です。

兵衛は光が指した先にある、高館山に社殿を建立し、『羽黒飛龍大権現』としてご神体を祀りました。『お浜降り』は御神体に里をみて喜んでもらう里帰りの神事です」と話してくれました。

また、お浜降りにかける思いを聞くと「みこしの担ぎ手の高館、増田、閉上の方々の思いを表しみこしに乗せて進んで行けるような行事にしたい」と話してくれました。



○営業時間・10時〜15時（最終受付14時30分）  
 ○料金・30分1800円（5月5日まで）5月6日以降は1400円  
 ○開催期間・5月31日まで

○住所・名取市高館川上字八反3-5  
 ○定休日・毎週水曜日・木曜日  
 ○連絡先・022-796-10813

御神体の里帰り  
 「お浜降り」  
 5月26日にみこし巡行



# 児童ら新聞に触れあう

## 増田西児童センターでことばの貯金箱

小学生に新聞の面白さに触れてもらおうと、河北新報大手町販売所が主催したイベント「ことばの貯金箱」が3月25日に増田西児童センターで開かれ15人の子ども達が参加しました。

「ことばの貯金箱」とは新聞の見出しや広告などから、好きな言葉（心に響く言葉、大切にしたい言葉など）を選び、そこに「写真」を台紙に自由に貼って楽しみ、そこに言葉で「つぶやき」を書き言葉をつむいでいきます。最後は出来上がった作品を発表し合うというワークショップです。



子ども達は、配布された河北新報・かほびヨンプレス（子ども新聞）から気に入った言葉や写真を切り抜いて、それぞれの貯金箱に「チャリオン」と言いながら入れていきました。1人の「チャリオン」という声に、まわりの皆は、「いいねー」と反応して盛り上げます。河北写真展に入選した蔵王の景色やモデルのコーディネート写真などを貯金箱にたくさん貯めて、時間が迫っても「もっと切りたい！」の声がやまず、記事を切り取る時間は延長されていきました。貯めた記事を台紙に貼る作業では、子ども達の目は真剣で集中して作品づくりに取り組み、言葉を書き込んでいきました。

発表では、他の子からまじまじとシートを見つめられ、照れながらも皆元気に発表していました。参加した子ども達からは、「とても楽しかった。新聞は白黒でカラーなんてないと思っていただけきれいな写真がたくさんあった」「新聞の中にも自分の興味があるものがあつた」



(石幡快・星野裕太)



という声が聞けました。児童センター館長の我妻良恵さんは「自分はどうしてこの言葉や写真を選んだのかという深い理由を子ども達それぞれが持っていて、とても感心した」と感想を話してくれました。

# 子どもの外遊びの未来

## 禁止事項の増加で 意欲薄れる

近年、校庭や公園など屋外での禁止事項の増加もあり、子ども達の外遊びへの意欲は薄れて来ています。彼らの興味を呼び起こすために、地域の大人達がすべきことを模索する「緊急シンポジウム 外遊びの未来」が3月23日、尚綱学院大で開催されました。主催したのは、一般社団法人プレーワーカース。本部のある名取や気仙沼を中



達には友達との家が離れているため、親と一緒に車を利用する方法でしか友達の家へ遊びに行けず、その影響もあつてか今は郊外の商業施設が遊び場になっているそうです。続いて分かって来たのが、世代間で禁止事項の折り合いが違うことでした。アンケートの中で親世代は、家族など頼れる年長者が地域の危険な場所を教えたり、向かうときに見守ってくれたりしていたので、ある程度危険を察知しながら外遊びが出来たそうです。今の子ども達は「大人が川や海が危ないというから、何が危険かわからないけど外で遊んでいない」と答えていたそうです。禁止事項が定着しすぎて、子ども達は屋外への探求心を持たなくなった実態が明らかになったと報告されました。

日本発の職業ブレイクダーとして活躍された天野秀昭さんは「大人達は、子ども自身の『外で遊びたい！』という意欲を尊重し、サポートしていくべきだ。そのためには、大人達の作った禁止事項などのシステムが必要以上に浸透し、子ども達の自由を奪わないように大人たちが努力してゆることが求められる」と述べました。(星野裕太)